

ふるさとの原風景再生プロジェクト「太市の郷」

『美しい竹林景が保つ、懐かしい未来を創造して行きたい』

崎谷久義（太市の郷）

はじめに

私たち心の原風景・里山の竹林が荒廃しています。太市は県内唯一のタケノコの里として其の名を知られていますが、農の不採算から管理放棄される竹林が増えてしまい、荒んだ竹藪が醸す景観貧乏の保全修景をテーマにした会活動に勤めています。太市は、県内産タケノコの91%以上を出荷する耕作地です。

手入れが行き届かない竹藪からは新竹が樹林地に侵入拡大、郷地全体が疲弊した情景を呈します。また不法なゴミ投棄も誘発し、春季にはタケノコを求める鹿・猪などの獣害を招き、人に依る盗掘も生む。地崩れの二次災害も懸念されます。人が生かされ、人が育んできた里地里山を、かつて慣れ親しんだ美しい竹林景に蘇らせたい！ふるさとの原風景を取り戻したいと想います。

保全整備の活動方法

会活動の一つに太市・相野四拾町、放任竹林や里道を保全する事業があります。ここは JR 姫新線軌道と大池の狭さく地で、鉄道の車窓からは放置竹藪の殺伐とした眺めが窺える負をディスプレイしたようなエリア。この場を郷地の仲間や共鳴する近郊住民ボランティア者たちの合力、行政の協力を得て保全作業にあたっています。整備手法は荒廃度がきついたために全竹伐採の工法を選択し、後から生える竹の選定で適正な竹林復活を果たすことを目論みました。美観を考慮しながら除竹を修復地に集積していますが、物量の多さがネック。敷地内が伐竹で埋め尽くされる状態になりました。腐敗、減量化に至るには相当年月を要することが課題です。ゴミ化した竹のチップー掛けも試みますが、いろいろな面で追いつきません。

全伐で日当たりが良くなった事が手伝い、今春の出筍期には新竹や笹状小竹が猛烈に繁茂して逆襲の追い討ちを掛けてきました。先人たちの知恵と汗で維持されていた里山。植生を理解した、持続できる管理形態の模索がつづきます。



《写真上左：整備前の里歩きワークショップ 上中央：整備で露出の不法投棄ゴミ 上右：整備で蘇る竹林の様子》

まとめ

生物多様性にも考慮して、子どもたちの自然体験学習の場に活用。鉄道沿線の乗客にも窓辺の心地良さを享受してもらえるなど、人々に親しまれ郷愁を与える美しい竹林景が保つ、懐かしい未来を創造して行きたい。みどり豊かで恵まれた環境を、次代を担う子どもたちに繋ぎたい！と思っています。

2012年2月に、フォーラム＋展示会

4日(土)・5日(日)の二日間 姫路市民会館のホールや展示場を会場に『竹の利活用を考える』と題したイベントを開催。里山竹林は筍栽培の採算性以外にも文化や精神的な豊かさを与えてくれる、なくてはならないもの。また竹の素材特性や成長力を生かしバイオマス資源として工夫するなど、新たな視点で竹材の価値を見出す。持続可能な利用・管理を考察してみます。